福音№.314　2014 年 7 月

「進化の教訓」

先日、「造化の教訓　創世記第一章の精神」という内村鑑三の文を読んで、あっと驚いた。数年前から「内村鑑三全集」を数人で少しずつ読み続けていて、今年になって、内村が今から 100 年前に書いたものを読んでみようと 1914 年の文章を読み始め、その中で「造化の教訓」に出会ったのである。（＊造化とは天地万物の造物主。天地、宇宙、自然のこと）

キリスト教はキリストによる救い、すなわち「十字架による罪の贖い、復活の命、再臨待望」であり、いつも共にいてくださるキリストこそ福音の喜びなのだと信じている。それはそうで、それこそ信じる者の今日を生きる力、変わらぬ平安に違いないが、「造化の教訓」の中に、「わが救いは宇宙の創造をもって始まったのである。」「福音は福音書をもって始まるのではない、創世記 1 章をもって始まるのである」とあるのに出会って、この私の救いも、キリスト降誕を待たず、天地創造をもって始められたのだと知って、衝撃を受けた。それは「私はこの父と母の子供だ」と思っていたのが、実はキリストによって「私は神の子とされたのだ」と知った時と同じような深い感動であり、自分では人生二度目の「目から鱗」だと思っている。

この感動を書きたいのだけれど、やはり内村の文章をそのまま載せるのが一番良いと思うので、そのまま書き写します。しかし 100 年前の文章なので、読みにくい漢字や分かりにくい言葉は、私なりに少し分かりやすくします。多少ニュアンスが変わるかもしれませんが、お許しください。（全集をお持ちの方は、格調高い原文でどうぞ）

造化の教訓　創世記第一章の精神　　(1914 年)聖書の研究 163 号　内村鑑三

1、はじめに神、天地を造りたまえり。

聖書は人類救済の歴史である、神が人を造り、これを完成し、人を自分の子と成さ

れるまでの順序過程を記した書である。聖書は人を離れて天地を論じない、天然のために為す天然研究(自然の研究)は聖書の関与するところでない、人の完成である、人の救済である、天使たちも知りたいと願っているのはこのことである。(1 ペテロ 1:12)ゆえに、聖書の初巻である創世記の示そうとするのも、このことにほかならない。創世記第 1 章はユダヤ人の宇宙創造説を載せてあるのではない、これが万物の起源に関する科学的事実を述べたものでないことは言うまでもない、これは人類救済の立場より見た宇宙観である、創世記第一章が伝えようとする事はこの事である、だからあえてこの章を科学的に研究する必要はないのである、天文学または地質学または考古学を引証してこれを説明する必要はないのである。創世記は聖書の一部分であれば、これもまた聖書的に解釈すべきものである。すなわち人類救済の立場より解釈すべきものである。

ゆえに「はじめ」とは万物のはじめを言うのではない。人類救済のはじめである。神の聖業(みわざ)にすべて始めがあり、終わりがある。「われは始めなり、また終わりなり」と神は言われた。(黙示録 1:8)そして神の聖業の終わりは人類の完成である、新しきエルサレムが用意を整えて天より降り、また死もなく悲しみも嘆きも痛みも無くなるに至って、神の聖業は終わりを告げるのである。こうして、この祝すべき終わりに対する始めなのである。人類の救済は天地の創造をもって始まったということである。山いまだなく、神、いまだ地と世界とをお造りにならない時より、人類救済の聖図(ご計画)は神の聖意(お考え)の中にあり、その実行の第一として天と地とを創造されたということである。

人類が救われるためには、そう、われらがキリストの救いに預かるためには、日月星座は天空に懸けられ、山は高く地の上に挙げられ、海は深くその下に掘り下げられる必要があったのである、わが救いは容易なことではなかった、これはわが短き一生をもって成し遂げられることではなかった。わが救いは宇宙の創造をもって始まったのである、このことを思うて、＊朝日昇り東の空が明るくなる時、夕陽西の山に入ろうとして夕雲が地を覆う時、又は夜空一面、星々が蛍の光のようにきらめく時に、われはわ

が救いの神をほめ、彼に感謝の賛美をささげるべきである。
＊の原文は「朝暾水を離れて東天漸く明かなる時、又は夕陽西山に春きて暮雲地を覆ふ時、又は星光万点螢火の如蒼穹に燦爛く時に」となっていて、内村の詩的高揚をうまく表現できないのが残念ですが、その情景を思い浮かべつつ。
「造化の教訓」はまだまだ続きますが、今月はここまで、1 章 1 節の部分だけを書き写しました。

人の救いのために天地万物を造られ、人の救いのためにご自身がキリストとして世に降られ、自ら十字架を負うて全人類の罪を贖い、すべての人に全き救いの道を開かれた神様。

そんな神様の御思いが、万分の一、いや億分の一も分かるはずもないけれど、それでも、それでも、
「あなたは、どこにいるのか」創世記 3:9
との問いかけから、逃げないでいよう。
「わたしに立ち帰れ、わたしはあなたを贖った。」イザヤ 44:22
と、今も呼んでおられる主の御声に聴き入っていよう。
「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」ﾏﾀｲ 9:13 と言われる、優しき主の御声に耳を澄まそう。
「これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」ﾏﾀｲ 18:14 と言われる、真実なる細き御声が聞こえるまで、
「一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」ルカ 15:10
と、今も待っていてくださる主の御声を聞きとるまで、いつまでも、どんな時も、主の御声に耳を傾けていよう。
「主は約束の実現(再臨)を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」2

ﾍﾟﾄﾛ3:9との御言葉を信じて、主のご忍耐を思い、終わりの日まで「一人も滅びないで」と念じ続けよう。